

三友会だより

初 夢

石川智信

その時確かに妻の右手は動いていた。私も妻もその手を見つめながら声をあげて泣いた。「すごい、奇跡が起きた。ばんざーい。」と手を振り上げた瞬間、目が覚めた。1月2日、私の初夢であった。傍らを見やると妻がベットから落ちそうになりながら寝息をたてていた。確かに右手は不自由だが、寝返りは自在に打てるようになっている。退院して間もない頃、じっと仰向けにしかねずに褥創を作りかけたため、夜中に何度も体位を変えていたことが今となっては懐かしい。元気な頃と同様に寝相の悪さを取り戻しており、去年は何度かベットと壁の隙間におちこんでもがいていた。苦笑しながら助け起こす私を見上げながら本人も「ひ・み・つよ。絶対に、ひ・み・つよ」と言って笑い転がっていた。

今年の正月、大切な家族を突然失った被災者の人々は、どんな初夢をみたであろうか。たとえ夢の中でもいい、もう一度亡くなった家族に会いたいと願う人々の思いは叶ったろうか。両親と兄弟を亡くし、祖父母の下で健気に遊ぶ子供の姿がいじらしい。夫を亡くし、仮設住宅の4畳半の部屋で1人正月を迎える老女が、わずかなおせち料理を位牌の前に置いて語る姿が辛く悲しい。「ごめんね、おじいさん。今年はこれだけしか用意できなくて。何とか生きていくから見守ってくださいね。」テレビは年末年始、多くの被災地の様子を伝えていた。もうすぐ1年という時が経過してもなお、人々の心は苦しいままであった。なぜあなたが死んで私が生きているのかという、答えの出ない自問自答を繰り返しているであろう人々の気持ちを思う時、私自身はどうしても妻が倒れた直後の自分の気持ちと重ね合わせてしまう。

普段はいることが当たり前であり、時にはうっとうしいと思う存在が、失ってはじめてかけがえのないものであったと知る。人とはまことに業深きものであると思う。そして生き残った者はどんなに苦しくても、その課せられた使命を見つけ出し、亡くなった人々の命を背負いながら生き続けなければならない。しかし1人では苦しい。傍にいてくれる家族や友人、地域の隣人がいてくれて、ともに泣き、ともに笑ってくれるから前を向けるのだと思う。

今年、妻は400枚以上の年賀状を送った。誕生日の花束というパステル画を絵ハガキにし、毎日左手で宛名を書き、今年目標である秋の個展の開催を伝えていた。そのせいで私が存じ上げない名前の方たちからも数多く賀状の返礼をいただいた。その中には自身が癌と戦っていたり、妻と同様に障害を持つ方達がいって、ぜひ直接会って話をしたいと記してあった。妻の前を向くエネルギーの源泉を知りたいらしい。

妻の初夢はまだだという。きっと夢を見る暇もないほど、昼間のリハビリで疲れているのだろう。でも正月の朝、「よーし、やるぞー」と気合を入れて起き上がる姿は、私の初夢がいつか正夢になるであろうと予感させてくれた。



主治医に思う「尊敬・信頼・感謝」

神宮西 1 丁目 外林 淳

昭和 56 年当時、東京都内の重度身体障害者入所施設は 1 施設でしたが、昭和 57 年に「社会福祉法人全国スモンの会」が運営する曙光園が新設されました。曙光園はスモンの会の福祉理念である“自立福祉論”に立脚してスモン患者の拠出金によって設立され他に例をみない施設です。全国スモンの会の会長さんが私の 2 年先輩（宮師）で「協力せよ」と招かれたのを受けて昭和 56 年に上京、平成 6 年に帰郷するまでの 14 年間施設の建設と運営に努めてきました。曙光園の開園当初はスモン患者のみの運営でしたが、東京都の要請を受けてスモンの他、筋ジストロフィー、パーキンソン、筋無力、小脳変性症、舞踏病などいわゆる神経障害の皆さんが、次いで脳疾患による車椅子生活の方が入所。定員 50 のベッドは常に満床の状態でした。だだ病態像が多様且つ複雑で、出身地も北海道から九州に及んだことで、医療介護や給食の面で各人が喜んでもらえる個別処遇の計画と実践には大きな苦労がありました。

施設利用者にとっては生活と医療は密接不可分の関係です。多様・複雑な病態像とともに入所前の病院との関係もあって、受診先は多方面に及び施設の受診介護は大忙しでした。私も毎日運転手兼介護人として業務に従事し、国立・都立・私立の病院の実情にもふれ、多くのドクターとの面識を得ることができました。特に都立の精神病院を受診することで未知の世界の実態に接し得難い勉強を得ました。

私は平成 6 年に帰郷しましたが、神の恵みでしょうか我が家から 180 歩の地に「いしかわ内科」が開院したのです。私はその「いしかわ内科」の初受診時に驚きと感動を深く覚えたのです。私は前述したように東京で長年に亘り障害者の皆さんの受診介護に努めてきましたが、私の頭に植えつけられた診察室の状況は“医師は動かず受診者が体を動かす”ということでした。そのことを当然と思っていました。ところが・・・石川院長は前部の聴診を終えるとスーッと立ち上がり私の背の方に足を運ばれて聴診をされたのです。このことは私の医師と患者との関係を描いた常識と固定概念を打ち破るとともに「この先生こそ患者の目線で患者本位の診察をされる得難いドクターだ」と感動と感銘を覚え、尊敬と信頼を強くしたのです。その思いは 16 年を経た今でも全く変わることなく愚妻ともどもお世話になっています。

石川院長は昨今“地域医療”の充実強化の為に日夜、建設的・献身的に尽力されています。日々午後の診察時間は患者宅を訪問され身体的弱者に温かい手を差し伸べていただいています。

なお、いしかわ内科は、祇園・神宮西の自治会に加入され、院長を先頭に全職員が自治会行事に参加されて地域の皆さんとの心のふれあいと交流を深めていただいています。

私は「石川院長こそ地域医療の充実をはかる先駆者である」と考えているのです。地域の皆さんもきっと同じだと考えています。

末尾になり申し訳ありませんが、万佐子先生の姿には心から敬意をと感動・感銘を覚えます。次々に描き出される書と絵画の美しさには心を奪われる思いです。

「梅檀は双葉より芳し」とか。万佐子先生は、幼少時より秀でた才能を有した上に、更に専門的な勉強を積み重ね人並み以上の実力を身に着けられていたこととは思います。然し何人も愕然とし、失意に暮れるほどの大病に罹患された先生です。その心情は極限のものがあつたと推測します。然し万佐子先生は病魔を克服され、人々に明るく優しい笑顔を見せられ、素敵な芸術作品を次々に完成されています。万佐子先生の人としての偉大さは、万人が同じ思いでいるのではないのでしょうか。

万佐子先生の成果の裏には院長先生の深い理解と力強い支えがあつたことと存じます。

石川先生ご夫妻の益々のご健勝とご発展を心より祈念して不束な筆を止めます。



コラム

山口 澄夫

★ 神武大祭今昔物語 ★

宮崎神宮大祭は、宮崎県主催のお祭りとして大昔から盛大に受け継がれてきた由緒ある祭であり、県民あげて参加したものです。昭和十五年（紀元二千六百年祭平和の塔ができた年）が最高の賑わいの年ではなかったかと思う。

当時はまだシャンシャン馬道中ではなくて、宮崎俵番（芸者置家）の芸者衆五十人位が二台の『山車』に乗って、太鼓・三味線を鳴らして市内を練り歩いたものです。シャンシャン馬は宮崎交通が観光バスを日南海岸に走らせるようになった頃（昭和三十四年頃）宮崎市はじめ延岡、都城、日南、日向、西都各市から一名ずつ代表を選び、若者に手綱を引かせて馬に乗せたのが大うけとなり今に続いているのである。



新年のご挨拶

平成 24 年、今年も私達受付は、病院の顔として笑顔
と思いを大事にし、日々精進して参りたいと思ひ
ます。本年もどうぞ宜しくお願い致します。(受付)



明けましておめでとうございます。
本年も人を愛し、仕事を愛し、外来
と訪問看護に精進してまいります。
宜しくお願い致します。(外来)



新年明けましておめでとうございます。
今年も各部署と密に連携を取り、利用者様やご家族の
方々から納得して頂けるリハビリを提供して参りたい
と思います。(リハビリ)



ご利用者にご家族の力になれるよう
職員一同、力を合わせて取り組んで
参ります。宜しくお願い致します。
(デイケア)



今年は、新しい職員を迎えて
のスタートです。利用者の方、
一人一人に対応が行き届くよ
う努めて参ります。本年も宜
しくお願い致します。(厨房)



今年は、『家族の絆』『仕事仲間の絆』『友情の
絆』様々な絆を大切にしながら、ご利用者、
御家族の皆のお役にたてる様、より一層精進
して参ります。本年も宜しくお願い致します。
(祇園デイサービス)

2011年いしかわ内科文化祭

11月3日（文化の日）に毎年恒例となったいしかわ内科文化祭が行なわれました。いしかわ内科デイケアや祇園デイサービスの利用者の皆さんが作られた作品の展示や小物の販売などを行いました。多くの方が見に来られ大いに賑わいました。また、3階では午後からデイケア利用者の皆さんに大正琴や尺八、ピアノ演奏などを披露して頂きました。素晴らしい音色を奏でて頂き、楽しい時間を過ごすことが出来ました。



講演会も同時開催されました。今年は南九州大学の教授・酒元誠治先生に「元気で長生きの食事」をテーマにお話しして頂きました。高齢者の方々の食事や栄養について学ぶことが出来ました。酒元先生ありがとうございました。



ご参加して頂いた利用者の皆様、ご家族、地域住民の皆様ありがとうございました。

『インターネット依存症』

ディケア 甲斐俊二

先日、雑誌をみていたら、今 子供達の間で「インターネット依存症」が問題になっているとの記事を読んだ。あまり聞きなれない言葉だが、詳しく読んでみると、長時間パソコンや携帯電話でインターネットやオンラインゲームをやっているうちに、自分の意思でやめる事が出来なくなり、学校に行かなくなったり、症状がひどくなると幻覚や幻聴、自分が何をしているかわからなくなるなど、精神疾患を患うこともあるそうだ。たしかにインターネットは手軽に情報収集ができ、大変便利なシステムである。私も毎日のように利用しているが、依存症になる程、パソコンや携帯電話を見ようと思わない。というより、年齢的なものなのか小さい文字がみづらくなり、パソコンや携帯電話を長時間みる事が出来ないといった方がいいかもしれないが……。しかし、私も小学生や中学生の頃インターネットと出会っていたら、果たしてどうだったろうか。もしかしたらと思うとすこしゾッとしてしまう。この記事を読んだ時、以前私の友人が話していた事を思い出した。それは、友人の会社で、退職する際に、机の目の前にいる上司に対して、パソコンのメールで辞表を送り、そのまま辞めていった事がその会社で話題（問題？）となったという事だった。嘘みtainな本当の話だが、その会社は一部上場の一流企業である。その時は「そんな一流企業でそんな事が起こるんだな」と驚いた記憶があるが、今は「そのぐらいの事は起こるかもしれないな」と思ってしまう。私の子供達もそうだが、今は携帯電話でも直ぐに「メール」でやりとりし、相手の声を聞く事は少ない。

私が高校生の頃は、下宿先から親に電話をかけると、「声が沈んでいるけど何かあったのか」と電話一本でいろいろな事を察し、感じてくれていた。今の子供達が親になった時に、自分の子供の変化を声だけで感じられるだろうか。辞表をメールで送るような若者は、会社で相手の目をみながら議論が出来るのだろうか。少し心配になってしまうのは、私だけだろうか。



祇園デイサービスセンター
介護職 竹内 留美子

利用者の方々と楽しい時間が過ごせるように、
笑顔で頑張っていきたいと思いま
す。

新人紹介

厨房
瀬戸山 千恵美



H23・10・31 より勤務しております。前職はパン屋でパンを作っておりました。同じ食にかかわる仕事ですが、まだ慣れない分、緊張しつつ仕事に取り組んでいます。しかし、利用者の方に美味しく食べて頂ける様な食事作りをして参りたいと思います。よろしくお願いします。